図書ニュース

大阪府立北野高等学校図書館
第５号　2018.12.4

本好きではないあなたへ

本を読むのはまあまあ好きでした。年の離れた末っ子だったこともあり、幼いときの雨の日は一人で絵本を読む子供でした。お気に入りの本を何度も何度も読むのが好きでした。少し成長したころ本棚には兄姉用の本があり、夏目漱石や川端康成など有名な日本文学を読みました。外国文学の全集もありましたが、翻訳した日本語にどうも馴れず好きではありませんでした。シャーロックホームズや恋愛小説や冒険小説を経ましたが、部活をする頃から本を読まなくなりました。今思うと、無駄に寝ていたのがもったいなかったです。受験生のときは逃避するため本を読みました。お気に入りの本を何度も何度も読んで安心していました。青年期は知識欲を刺激してくれる本をよく読みました。仕事をすると役に立つ本が主役になります。子育てのときにはそんな時間は全くありません。そして子育てが一段落した今、ぼちぼちまた本を読み始めています。スマホや電子ブックの向こうには面白そうな本が無数にあります。これらを全部読むには、ちょっと時間が足りないな、と感じています。

『青春を山に賭けて』　植村（うえむら）　直己（なおみ）　（購入予定）

高校時代、タイトルだけで本屋で買いました。当時、六甲山縦走などをやっていて、青春の２文字に惹かれました。後に作者が、世界で初めて五大陸の最高峰を登った登山家、著名な冒険家だと知りました。大人になって、スキーでよく行く兵庫県神鍋高原近くの出身だと認識し、懐かしく身近に感じるようになりました。植村直己さんは北米大陸最高峰マッキンリーの冬季単独登山で遭難し(おそらく)命を落とされました。遭難の報が入った記者会見で植村夫人が、「冒険は生きて帰ってこないと意味がない、と常々言っていたくせに･･･、ちょっとだらしないと思います」と答えたのは強烈でした。植村直己さんの、ほとんどの登山、冒険は単独行です。計画・実行・栄誉・責任を一人で請け負う、という姿勢に当時は憧れました。大学時代、僕はハンググライダー同好会に入るのですが、誰も知らない世界に一人で飛び込む、というのはこの本の影響だったのかもしれません。

『七帝柔道記』　増田(ますだ)　俊也(としなり)　〔913/MA〕

北海道・東北・東京・名古屋・京都・大阪・九州の七つの旧帝大で、七大学総合体育大会というのがあって、様々なスポーツで対抗戦をしているそうです。始まりは柔道でした。オリンピックなどで行っている柔道は正式には日本傳講道館柔道といいます。明治時代に嘉納(かのう)治五郎(じごろう)が創始した文武の流派です。第 2 次世界大戦以前は、柔道には大きく３つの流れがありました。講道館、大日本武徳会、高専柔道です。敗戦後、戦闘術である武術全般は GHQ によって禁止されました。大日本武徳会は強制解散となり、高専柔道大会は 1940 年大会が最後となりました。多くの人物が武道の復活に尽力しました。柔道では講道館が残りましたが、武道よりスポーツの側面が強くなったのは仕方がなかったのかもしれません。高専柔道の流れを汲んだ柔道を復活させたのが、以前大会を主催していた七つの大学です。同じ柔道でも講道館とルールが異なります。15 人団体戦で勝利するために徹底的に寝技を鍛えるのが七帝柔道です。作者増田俊也さんが北大柔道部で、練習を通じて人間的に成長する青春小説が『七帝柔道記』です。登場するのは実在の人物で、その中に主将の 和泉唯心(いずみゆいしん)という人がいます。広島弁の強烈な個性で様々な名言を吐いているので紹介します。

「*勝とうと思わにゃ勝てんので*」

「*目立つ者、勝つ者だけが偉いとはわしらは考えん。むしろ目立たんもんの中に本当の貢献者がおるんで*」

「*人間はのう、自分のために頑張れんでも人のためなら頑張れるんで*」

「*この北大柔道部っちゅう畳の上には生きることの意味すべてが詰まっちょる。練習そのものがあんたに教えてくれるじゃろうて*」

「*あんたら一年目(一回生)は今しか見えんかもしれん。じゃがの、北大柔道部は戦前から連綿と続いとるんで。点じゃのうて線で自分のおる場所を確認してみんさい*」

「*後ろを振り返りながら進みんさい。繋ぐんじゃ。思いはのう、生き物なんで。思いがある限り必ず繋がっていくんじゃ*」

『短歌をよむ』　俵（たわら）　万智（まち）　〔911/T30/2〕

中学、高校と和歌や短歌を習いました。枕詞や掛詞などは覚えましたが、僕の人生には絶っっ対関係ない、と思っていました。後悔してます。ちゃんと学んでおけば良かった。チャンスだったのに･･･

「*「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日*」

元々はサラダではなく唐揚げだった！ということを、半年ほど前、ご本人がつぶやきバズりました。が、この本の中にすでに書かれています。ついでに７月６日でもなかったそうです。

「*落ちてきた雨を見上げてそのままの形でふいに、唇が欲し*」

空を見上げたらそこに顔があり、口づけの形になっていた。というところにもう少し能動的な感触をこめたい、というのが「唇が欲し」だそうです。

「*親は子を育ててきたと言うけれど勝手に赤い畑のトマト*」

俵万智さんにとっては、俳句と短歌は作り方が違うそうです。俳句は短距離走に似て、瞬発力でどんどん作っていくもの。一方、短歌は中距離走に似て、１つの歌に言葉がぴたっと当てはまるまでじっくり校正を繰り返すもの、なんだそうです。倒れたトマトの木？にも、りっぱな赤い実がなっているのを見て、すでに出来上がっていた上の句にぴたっと当てはまったそうです。

「*あかねさすテラスはつかに春を告げくるんと次の葉を出すアビス*」

〝テラス〟と〝照らす〟を引っ掛け、枕詞の〝あかねさす〟を使って遊んだそうです。短歌は元来文字を観賞するものではなく、耳で聴く文字通り〝歌〟なので、声で伝えると枕詞の存在意義が分かるそうです。

「*数学の試験監督する我の一部始終を見ている少女*」

元々高校の国語教師だった俵万智さんが考査監督をしていると、よく目の合う生徒がいる。よく目が合うなぁと思っていたときに気が付いた。彼女はずっと自分を見ている。だから、自分が顔を上げたときに目が合うのだ。「あっ」という心の揺れを種に、何に心が揺れたのかを見つめ直す作業が短歌を詠むことなのだそうです。

俵万智さんは「悲しいときはじっくり悲しむ」のがモットーだそうで、そういうときに多く歌が生まれるとのことです。短歌を 読む ことと、詠む こととに言及しています。Ｓ音やＫ音の言葉の響きの話などは、ラップなど作詞に通じるかも、です。

『ゲド戦記』　影との戦い・こわれた腕環・さいはての島へ

ル＝グウィン（著），清水（しみず）　真砂子（まさこ）（訳）〔933/L9/1-1～6〕

「ハリーポッター」「ナルニア国物語」「果てしない物語」などのファンタジーの中で、東洋的な思想を感じるシリーズです。

魔法使いの物語です。舞台はアースシーという世界です。海に大小の島々が点在しています。大魔法使いであることは風を操る大航海者であることを意味します。力と技がなければ魔法使いになれません。力は持って生まれたもの、技は習得するものです。が、技を習得するには知識が必要です。物や人には我々が使う一般的な名前と、それらが初めて作られたときに授かる「真の名」があるからです。魔法をかけるには対象の「真の名」を知らなければなりませんが、川の石、海の石、山の石、同じ石でもすべて異なります。ですから人に自分の「真の名」を教えるということは、大きな信頼を意味する、といった世界観です。

ゲドは主人公ハイタカの「真の名」です。大航海者であり、竜と交渉できる竜王であり、大賢人であるハイタカの若かりし頃の失敗が第１作「影との戦い」です。真の魔法使いは、魔法を知れば知るほど使わなくなります。雨を呼ぶ魔法を使えば、隣の村では旱魃が起こるかもしれません。世界の均衡を知らずに魔法を使うのは危険なことなのです。これが、修行を始めたばかりのハイタカには歯がゆくてたまりません。力を持って生まれたハイタカはやがて大きな過ちを犯します。

第２作「こわれた腕輪」は正式な魔法使いになったハイタカの青年期の物語です。異国で大きな力を持つ太古の精霊たちと戦います。第３作「さいはての島へ」ではハイタカはすでに大魔法使いです。世界から、良いもの、本当のものが失われていきます。良い声で歌っていた歌い手は歌詞を忘れてしまいます。美しい布を織っていた職人も織ることを放棄してしまいます。まるで、この世に穴が開いて流れ出ていくかように、秩序が失われていきます。大魔法使いハイタカは持っているすべての力と技を使ってこの問題に挑みます。

徒然なるままに、４つの本を紹介しました。本を読む時間なんてない！と言わないで、一度手にとって見てください。